

〈3〉埋もれた歴史資源を活用した 宇都宮の生活景創造に向けた研究

市政研究センター 専門研究嘱託員 岡田 雅代

1 はじめに

明治から昭和にかけた宇都宮の写真や地図が掲載された書籍を見ると、通りを歩く人のにぎわい・音・匂いなどと共に懐かしさも加わり、日々の暮らしが色濃く反映された生活景¹を彷彿させる。しかし、現代のわたしたちの暮らしは大きく変化し、生活景は喪失の危機にさらされている。

生活景を再生する現代的な手法としては、地域資源²を手がかりとした景観まちづくりにヒントがあると筆者は考えている。平成19年度の専門研究では地場材料である「大谷石」を活かした生活景に関する研究を行ったが、平成21年度専門研究である本研究は、歴史的観点に軸足を置き、「歴史資源」を活用した宇都宮の生活景について今後の方向性を探るものである。

歴史資源を活かした都市計画関連の施策としては、古都保存法や歴史的まち並みがおおむね保全される地区を対象とする伝統的建造物群保存地区が従来からあるが、2度の戦災に見舞われた本市は、散見するところ対象地区は少ない。一方、平成16年の景観法制定や、平成20年の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（略称「歴史まちづくり法」）」も制定され、ふつうのまちの歴史を活かした景観が注目されつつある

¹ 本研究では、場所と地域の関わりや、人々の暮らしが垣間見られる風景を生活景とする。また、身体感覚をもって理解できる歴史や、実際に五感で感じ得る空間範囲を主な対象とする。生活景を論じる意義や、変化にさらされる生活景に関しては、日本建築学会『生活景』学芸出版社、平成21年3月に、これまで日本建築学会都市計画委員会景観小委員会等での生活景に関する議論や事例が紹介されている。

² 地域資源については宇都宮の餃子に代表されるような食を題材とした地域おこしなど、様々な文脈から語られるが、本研究は景観まちづくりの手がかりとしての地域資源（景観資源）を扱う。

³。本市においても歴史的なまち並が残るところは一見少ないが、市街地をよく見ると城下町の堀割や町割の痕跡はあちこちに残っている。また、景観の中でもとりわけ生活景に着目することで、支配者の歴史のみならず、地域の暮らしや人の営みに密着した、そこに住み働く人々の歴史も歴史資源の対象となるのである。

こうしたなか、宇都宮城の一部を再現した平成19年3月の宇都宮城址公園（写真1）の供用開始を機に、宇都宮の歴史資源を再生する活動がこの数年活発になりつつある。たとえば、第二次世界大戦の宇都宮大空襲で消失した建造物等の再建が相次いで行われている（写真2・3）。また、宇都宮城址公園では、江戸時代の堀に咲いていた蓮の花を復活させる取組⁴や、社参行列を秋の宇都宮城址まつりで行う⁵など、失われた風景の再生も各地で行われている。

このように、現存する歴史資源だけでなく、喪失したもの、市井で語りつがれるもの、あるいは歴史研究からすると新しい、戦後から高度成長期を経た四半世紀くらいまでの身近な歴史資源を活用することで、景観まちづくりのみならず、地域の記憶を甦らせ、地域ア



写真1 宇都宮城址公園



写真2 二荒山神社大鳥居



写真3 慈光寺赤門
筆者撮影

³ 日本都市計画学会編集委員会「特集論文：ふつうのまちの『歴史を活かす』」『都市計画』277号、平成21年2月

⁴ 市民活動団体「宇都宮城跡蓮池再生検討委員会」により、江戸時代の蓮の種を発芽させ堀に復活させる活動を行っている。

⁵ 市民活動団体「よみがえれ！宇都宮市民の会」主催による。

イデンティティを再確認する可能性がある。そうした一連の取組が生活景の創造につながるものと期待される。

そこで本研究は、地域ごとの歴史資源の再発見とその活用に向け、かつての営みや記憶を現代のまちに継承するための方法を探り、その一步として、宇都宮城下及び周辺を中心に検討を行う。

2 研究の方法と本研究の構成

(1) 研究の方法

研究の方法と本研究の構成の関連を表1に示す。本研究は専門研究として、研究に際してワーキンググループは特に設置していないが、適宜関係課の協力を得ながら進めた。

(2) 本研究の構成

次章では、本市の歴史資源の背景を理解するために都市計画・景観まちづくりの視点から歴史を振り返る。具体的には本市のまちの成り立ちと変遷を、ターニングポイントとして①中世、②近世、③近代（明治～大正）、④近代（旧都

市計画法による戦前の都市計画）、⑤戦災復興と戦後（おおむね昭和 30 年代前半まで）の大きく5つに分類し、その概要を紹介する。次に、4章ではこうした本市の歴史的背景を踏まえたうえで、江戸時代の宇都宮城下と現代を比較しながら現地を見て歩く試みと、その結果再発見した埋もれた歴史資源を紹介する。

5章では、再発見された歴史資源をどう活用するかといった観点から、歴史資源を活かした事例紹介を、視察の成果を基に具体的に行う。以上を踏まえ、6章では本市の歴史資源を活用した生活景の創造に向け考察を行い、今後の課題を整理する。

3 宇都宮のまちの成り立ちと変遷

(1) 二荒山神社と宇都宮城の築城及び奥州大道の宿場町としてのまちの形成（中世）

古代より、国土の安泰と人々の繁栄を祈るため、宇都宮大明神（二荒山神社の別称）が荒尾崎（現パルコ付近）に奉られたが、平安時代中頃、現在の位置である臼ヶ峰に遷座した。平安後期になり

表1 研究の方法と本研究の構成関連図

		本市参加職員 専門研究嘱託員のみ ●	前段（基礎研究）	3章	4章	5章	6章
			現状把握	都市計画・景観の視点からみた歴史的ターニングポイントの整理	古地図やまち歩きから再発見した、埋もれた歴史資源の発掘	再発見された歴史資源の活用方策	まとめ 本市の生活景創造に向けた考察と課題
H20～21年度 2年間対象	新聞記事の収集	●	☆				
6月～3月	書籍の収集とデータベース作成	●	☆	☆			
1月～3月	収集資料の分析	●		☆			
10月～3月	地図の収集 比較による変化把握	●	☆	☆	☆		
10月、1月	関係課ヒアリング	●	☆				
8月～3月	専門家・市民ヒアリング 宇都宮の洋館研究家・所有者	●	☆	☆		☆	
8～10月	イベントや展示会への参加	●	☆ 宇都宮空襲展		☆ ベストフェスタin西	☆ 語りの小祭りin大谷	
1月	フィールド調査	●			☆		
1月29日	まち歩き（現地研修）	●			☆ 宇都宮建設技術協会		
2月2日	ミニ研究会「城下町の近代都市づくり（城下町都市の中の宇都宮）」 講師：筑波大学大学院人間総合科学研究科 野中勝利准教授	●		☆		☆	
3月10～11日	山形県鶴岡・酒田市内視察	●				☆	
3月16日	歴史資源の活用（視察報告） ＋意見交換会	●				☆	☆

宇都宮大明神の社務職についた藤原宗円が居を構えたのが宇都宮城の始まりとされる⁶。その後、宗円の子孫が宇都宮氏を名乗り豊臣秀吉に滅ぼされるまでの約500年にわたり、宇都宮氏一族が社務職と宇都宮城主を務めた。平安中期の『和名抄(わみょうしょう)』では、宇都宮は池辺郷(いけのべのこう)と呼ばれ、荒尾崎と臼ヶ峰は尾根でつながっていた。また、池辺郷の由来となる大きな池(鏡ヶ池)が、二荒山神社の足下に広がっていた(図1・2)。その鏡ヶ池は規模を徐々に小さくしながらも近年まで残っていた⁷。このように中世には二荒山神社の門前町⁸として、あるいは宇都宮城の城下町としてまちが形成されたほか、奥州と京・鎌倉とのつながりが強くなるにつれ、奥州大道(旧奥州街道)の宿、古多橋(こたばし)駅⁹としてまちが形成された¹⁰(図1)。

(2) 近世の街道整備と本田正純の宇都宮城大改築

江戸時代になると、宇都宮城主は二荒山神社の社務職とは切り離され¹¹、譜代大名として幕府より派遣されるようになった。幕府により奥州街道など街道が整備され、参勤交代が行われるとともに



図1 旧奥州街道と中世のうつのみやのまち
「中世の宇都宮のようす」『宇都宮城(冊子)』

宇都宮市教育委員会文化課より引用 文字筆者加筆



図2 中世(鎌倉時代)の宇都宮大明神と鏡ヶ池周辺イメージ図

徳田浩淳『日野町の歴史』(株)都賀屋・篠崎材木店、昭和56年、4頁の図を基に筆者作成

に、徳川家康の逝去により日光東照宮が造営され¹²、将軍などによる日光社参も始まった。江戸時代初期より歴代大名による城の改修や城下の整備も行われたが、現在の宇都宮市の骨格に大きな影響を与えたのは、本多正純による宇都宮城の大改築である。本多正純は家康の7回忌に合わせ、数年の在任期間中(1619~1622)に旧奥州街道・日光街道の付け替えを行うと同時に、掘割や町割の整備、臼ヶ峰と荒尾崎の間の切り通しの開削(現大通り)、大手門を御橋(みはし)付近から江野町口に移すなど、宇都宮城及び城下町の大改築を行った(図3~5)。同時に、農村部においては宇都宮領内300村の検知も行った¹³。

⁶ 宇都宮市教育委員会事務局文化課編『宇都宮城のあゆみ』宇都宮市教育委員会、平成19年3月、11頁

⁷ 荒川清次郎編『明治の宇都宮1宇都宮市案内』株式会社国書刊行会、昭和57年、71~73頁(荒川清次郎編『明治の宇都宮1宇都宮市案内』宇都宮商工会議所、明治42年12月の再発行)には、鏡ヶ池に蓮の花が咲く写真が掲載され、「今はささやかなる形を残すのみ」と記されている。大正15年の宇都宮市街地の地図にも鏡ヶ池が記載されている。さらに徳田浩淳『宇都宮の歴史』昭和54年、309頁には、年代が確定できないもの「往年の名残をとどめていた鏡ヶ池」として、写真とともに紹介されている。

⁸ 馬場(ばんば)ではなく、日野町側に形成されていた。

⁹ 鎌倉時代の『東鑑(あずまかみ)』では、古多橋駅として宇都宮が呼ばれていたという。古多橋駅も、旧跡「亀井の水」の近く、宇都宮市田川第一処理場付近とされ、『宇都宮60年誌』宇都宮市、昭和35年、41頁には、古多橋駅のあった場所として市の石碑の写真が紹介されている。

¹⁰ 『宇都宮城のあゆみ』(前掲)によれば、宿は現在の下河原・天神・三番町・大通り付近にあり、町屋は現在の大通り1~2丁目・一番町・二番町付近にあったとされる。

¹¹ 宇都宮市史編さん委員会『宇都宮市史 第6巻(近世通史編)』宇都宮市、昭和57年2月25日、2頁

¹² 日光東照宮の建設には、後に宇都宮城主となる本多正純が奉行としてたずさわっていた。

¹³ 『宇都宮市史 第6巻 近世通史編』(前掲)、21頁



図3 本多正純の大改築による城下町の変化

「正純の大改築による城下町の変化」宇都宮市市政110周年記念事業実行委員会『宇都宮市市政110周年記念 わがいとしのふるさと宇都宮』平成18年より引用



図4 新旧日光街道・奥州街道の位置

宇都宮市「宇都宮城地の地形と新・旧街道の推定図」『改訂うつのみやの歴史』平成2年、150頁より引用



図5 江戸時代後期宇都宮城下絵図

「宇都宮御城内外絵図」『宇都宮城(冊子)』宇都宮市教育委員会文化課より引用

一方、町の人々の暮らしも江戸期になると活気をみせ、二荒山神社例大祭の附祭り（つけまつり）として城下の町ごとに屋台（写真4）や山車などの出し物とともに、手踊りで練り歩く菊水祭なども発達した¹⁴。また、日光街道と奥州街道の追分

¹⁴ 池田貞夫『宇都宮菊水祭の賑わいー二荒山神社付祭り（つけまつり）出し物のうつり変わり』宇都宮市文化財調査員池田貞夫（私家版）、平成20年11月1日、10頁

のまちとして人々の往来も増えた。この頃にはまちの中心は追分のある伝馬町や池上町界限に移った¹⁵。かつては宇都宮城主が神社と城を行き来した界限も町家となり、祭



写真4 伝馬町の屋台（ベストフェスタ in 西）筆者撮影

事には二荒山神社周辺の門前町も大いに賑わった。こうして城下町としての基盤整備は、おおむね江戸時代に礎が形成されたが、幕末から明治初頭の戊辰戦争において城下町の多くが焦土と化した。

(3) 城下町を基盤とした近代化の過程

1) 近世から近代への過渡期

明治4年の廃藩置県により宇都宮藩が廃止され宇都宮県が設置されたが、幾多の合併を経て明治6年に栃木県となった（県庁所在地：栃木市）。

明治5年には旧宇都宮城地に東京鎮台の兵舎が建ち、翌年より明治17年まで駐屯、旧城地は陸軍省が管轄する国有地となった。その後、明治22年旧城地の一部を宇都宮町の基本財産とした¹⁶が、民間等に払い下げられ、堀は順次埋め立てられていった¹⁷。また、明治6年の太政官布告に伴い、最初の公園として二荒山神社境内と門前の広馬場が宇都宮公園（馬場公園）として開設された¹⁸。外郭付近には病院、栃木県支庁（後に郡役所・警察署）、裁判所などの公共施設が相次いで建設され

¹⁵ 宇都宮市『改訂うつのみやの歴史』宇都宮市、平成4年、昭和59年改訂版、192頁

¹⁶ 宇都宮市議会編『宇都宮議会史記述編1』宇都宮市議会、平成8年3月31日、85～87頁

¹⁷ 徳田浩幸『ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 宇都宮』株式会社落合書店、昭和54年5月1日、42～43頁の地図を参照した。

¹⁸ 宇都宮市史編さん委員会『宇都宮市史 第8巻（近・現代編II）』宇都宮市、昭和56年12月15日、251頁によると、広馬場（通称パンパ）は、旧戸田藩主の領地だったが国有化され境内とともに公園として指定された、その後、境内と公園を分離し、国から本市への払い下げの条件から、昭和10年に公園が道路となった経緯がある。一方で公園に露店がたち、宇都宮の浅草といわれる「仲見世」が形成され、昭和30年代前半まで続いた。

た。

2) 三島通庸による県庁移転と基盤整備事業

こうして近世から近代へと変化の兆しをみせたが、栃木県令として明治16～17年にかけ就任した三島通庸（みちつね）が、宇都宮のまちの近代化に与えた影響は大きい。たとえば、県庁の宇都宮への誘致運動を追い風に、県庁移転と並行して近代的な洋館の県庁舎を建設し、それを中心とする県庁通り¹⁹や、大通り²⁰などの道路整備や路線変更を行った。さらに刑務所²¹などの建設も行っている。

3) 運輸の変革と鉄道の開通

日常の運輸は近世からの駄馬・荷車・舟運が中心だった²²。明治5年に伝馬町から東京へ往復する乗合馬車が現れたが、明治18年、東北本線大宮・宇都宮間の開通により廃止された。続いて明治23年3月に日光線が開通。また、明治28年には宇都宮軌道運輸株式会社の設立申請を機に、昭和6年まで4社8系統の民間による鉄道（人車・軽便鉄道）が開通した。近郊に延びる鉄道の輸送の対象は、大谷石の運搬と市街地と村落を結ぶ一般旅客であった²³。この間、明治22年町村制の制定により宇都宮町となり、7年後の明治29年、埴田・梁瀬など近隣の村が編入し宇都宮市（人口約3万5千）として市制がスタートした（図6）。

4) 14師団誘致による郊外の軍事施設と基盤整備

¹⁹ 県庁から大通りまでで大通りより南側は戦後に整備された。こうした一連の事業は住民の寄付や労役によりおこなわれたという。

²⁰ それまでは裏通りだった馬場町～大工町の道を開削し、県庁の整備とあわせ、池上町から大工町まで通した。また、明治18年の鉄道開通時には、上河原から駅まで開削した。

²¹ 「風見ノアル風景」として版画家の川上澄生により描かれている。刑務所も木造の洋館で絵になる風景だったことがうかがえる。橋本昭次・安達光政執筆／阿部昭・大町雅美・大獄浩良監修・執筆、『写真でつづる宇都宮百年』、宇都宮市制100周年記念事業実行委員会、平成8年4月1日、39頁

²² 宇都宮市史編さん委員会、『宇都宮市史 第7巻（近・現代編I）』、宇都宮市、昭和55年3月25日、534頁

²³ 『宇都宮市史 第7巻（近・現代編I）』、（前掲）、624頁

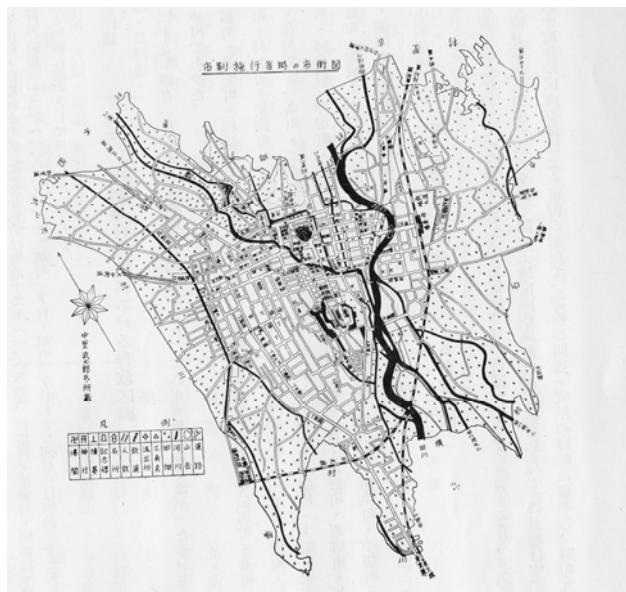


図6 宇都宮市制施行当時の宇都宮市地図
宇都宮市『宇都宮60年誌』昭和35年、68頁より引用

一方、近代化の過程で、富国強兵を背景に日露戦争が終了した明治38年、師団の増設が行われた。栃木県内や宇都宮の有志により小倉で編成された第14師団の誘致運動が起きた。その結果、宇都宮への移転が決まり明治41年に第14師団司令部をはじめ、隷下の連隊が次々と移駐した²⁴。それら軍事施設の多くは旧市街地に隣接する国本村・姿川村・城山村に設置された。こうして14師団の駐屯により、明治42年に軍事施設を結ぶ軍道が開削され桜の苗が植えられる（桜通り）²⁵など、軍事施設周辺の整備も行われた。また、今でいう新住民が流入し、軍事施設の周辺には住宅地も広がることとなった。こうした人口増に対応し、大正5年、今市町から取水する水道の給水も始まった。

(4) 郊外の拡大と戦前の都市計画

1) 旧法による都市計画施行地の指定

大正8年、都市計画法（旧法）と市街地建築物法（建築基準法の前身）が制定された。宇都宮市

²⁴ 宇都宮市史編さん委員会『宇都宮市史 第8巻（近・現代編II）』宇都宮市、昭和56年12月15日、609～616頁

²⁵ 桜の季節は花見客でにぎわったが、道路整備に伴い昭和37年に伐採された。小笠原正謹『桜大谷通りの今昔』桜地域まちづくり協議会『さくらの今をたずねて』平成21年1月、67頁

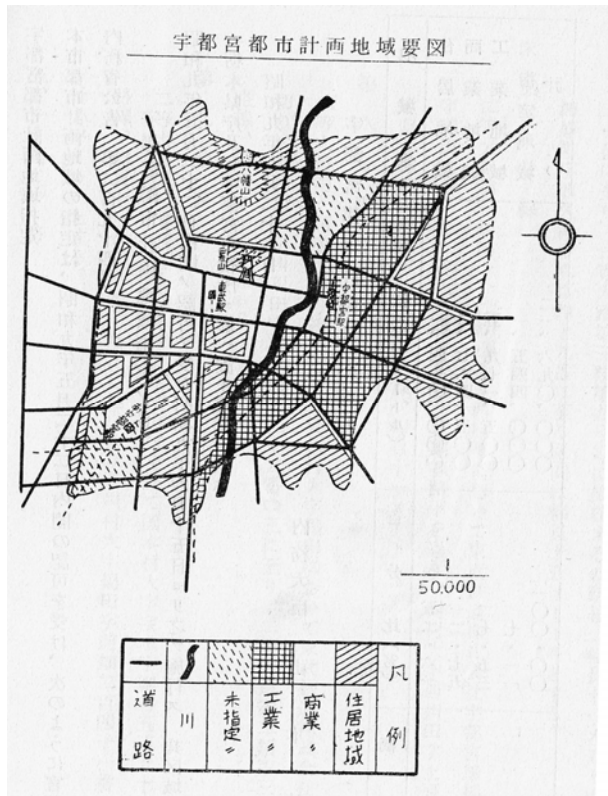


図7 都市計画区域の拡大と用途地域

宇都宮市『宇都宮 60 年誌』昭和 31 年，660 頁より引用



写真5 相生町の近代化の宇都宮市地図

建設省編、『戦災復興誌 第八巻 都市編Ⅴ』，(財)都市計画協会，昭和 35 (1960) 年 3 月 20 日発行，86 頁より引用

は都市計画施行地の要件である人口 10 万には達していなかったが，昭和 2 年施行地として指定された²⁶。翌年には都市計画区域の決定，昭和 4 年に都市計画街路網が告示され，昭和 9 年に都市計

画地域（用途地域）が指定された（図 7）。また，昭和 10 年に風致地区（八幡山・臼ヶ峰・御本丸）が指定され，昭和 17 年には都市計画公園として陽南公園が指定された²⁷。こうして本市においても「計画」としての近代都市計画が始まったが，大正 11 年に都市計画の基本調査を開始し，大正 13 年には内務省に都市計画法適用都市への申請をしていた²⁸。その背景には，明治時代後期まで市民の主要な交通手段は人力車や自転車であったが，鉄道に引き続き，宇都宮の交通に大きな影響を与えた，大正 8 年前後の乗合自動車（タクシーのようなもの）の出現があった。これにより，国道のほか，市街地から八方に郊外に向かう県道や地方道路も整備された²⁹。しかし，市全体としての計画がなく都市計画の必要性が高まったのである。

2) 東武宇都宮線の開通と土地区画整理事業

郊外へと市街化が進むなか，大正期には刑務所の位置がまちの中心部となり，昭和 4 年に西原（現明保野・宇都宮市文化会館）に移転した。東武鉄道³⁰により東武宇都宮線が昭和 8 年に開通し，跡地に東武宇都宮駅が設置された。以降，南西部への市街化も加速し，近代都市計画「事業」である土地区画整理事業が昭和 6 年に陽西地区，続いて昭和 7～12 年に陽南地区で施行され，近隣村落の一部編入による行政区域の変更も行われた。

3) 商業都市から工業都市への転換 ～軍需産業の誘致と市街地の周辺へのひろがり～

宇都宮は近世より商業のまちとして栄えたが，戦時下の地方への工場分散の国策と積極的な誘致

²⁷ 宇都宮市『宇都宮 60 年誌』宇都宮市，昭和 31 年，644～668 頁

²⁸ 『宇都宮市史議会史 記述編 1』（前掲）666～669 頁

²⁹ 『宇都宮市史』（前掲）及び『宇都宮市史 第 8 巻（近・現代編 II）』（前掲）574～552 頁

³⁰ 明治 32 年，北千住～久喜間で営業開始した。本市では昭和 6 年に東武鉄道が宇都宮石材軌道株式会社と合併した。

²⁶ 田代善吉『宇都宮市史』下野史談会，昭和 3 年，323 頁

活動により、昭和10年代中頃には軍需工場の移転が本格化した。たとえば、昭和18年には江曾島に中島飛行機が、下平出には日本製鋼が進出している。こうしたなか、市街地の拡大とともに、昭和18年、都市計画指定地の区域も拡大した。戦後、昭和30年代に工業都市へと大きく転換するが、その前段はこの頃より始まっていたといえる。しかし、終戦間際の昭和20年7月の戦災により市街地面積の50%が罹災することとなった³¹。

(5) 戦災復興都市計画と戦後

1) 戦災復興都市計画と復興土地区画整理事業

こうして宇都宮の市街地は、近世・近代の名残を残す建造物やまち並の多くを消失した。しかし、終戦の翌年の昭和21年には、戦災復興都市計画適用地として指定され、幾度かの計画変更を繰り返しながらも、大通りの道路拡幅や、池上町から旭町までの道路（現シンボルロード）や南大通り（写真6・7）など、戦前の都市計画を基調としながら街路計画・土地利用（用途地域）・公園緑地計画・上下水道計画などを定めた。またこれらと並行して、バンパを含む中心部の復興土地区画整理事業や、防火建築帯の指定による不燃化と近代化の象徴としてRC造の共同ビルも建設され（写真5）、急速に都市の復興を果たした。この間、近隣町村との合併により宇都宮市の市域は拡大し、人口は急増した（約22万）。

一方、昭和29年の栃木県工場誘致条例や首都圏整備計画による市街地開発地区の昭和36年の指定を背景に³²、本市としても昭和30年代になると工業団地造成による工場誘致を積極的に行った。これにより、工業化へと大きく舵をきることとなり、更なる人口増と市街地の拡大につながった。



図8 宇都宮城址周辺の昭和29年空中写真
『空中写真（宇都宮）』国土地理院、昭和29年



図9 歴史資源を活用した景観まちづくり
まち歩き用マップ

宇都宮市教育委員会文化課『江戸時代宇都宮城下復元図』宇都宮市教育委員会文化課を基にまち歩きのポイントを筆者加筆修正



写真6 百間堀と土 写真7 百間堀跡から見た現代の大イチョウ
壘上の大イチョウ

左：塙静夫・石川健 解説、随想舎編『昔日の宇都宮 石井敏夫コレクションより』随想舎、平成9年7月1日、67頁より引用（石井敏夫氏所蔵）、右：筆者撮影

2) 旧城址周辺の風致地区の変更と堀の喪失

昭和20年代後半まで、西部の堀は残っていたが（図8）、戦後、旧城址周辺に仮設の住宅が建ち、瓦礫が埋められるなど、復興の過程で昭和27年に御本丸の風致地区も変更し、対象地区の規模を大

³¹ 建設省編『戦災復興誌 第八巻 都市編V』（財）都市計画協会、昭和35年3月20日、83～128頁

³² 『宇都宮市史』（前掲）及び『宇都宮市史 第8巻（近・現代編II）』（前掲）91頁

幅に縮小した³³。高度経済成長時代にさしかかる頃には、残された堀の汚染も進み、経済成長と引き替えに次第になくなっていった³⁴。

4 古地図を手がかりに現代のまちを読み解く試み

こうして、戦前の市街地の古いまち並みや堀・土塁もなくなり、宇都宮のまちは歴史を感じさせるものが少なくなった。しかし、江戸時代の宇都宮城下の地図や、明治から昭和初期までの地図と現代の地図をよく比較してみると、現代の道や公園に、近世の町割りが今もなお、あぶり出しのように見てとれる。また、近代の道路整備や都市計画などが重なり今に至っていることが想像できる。そこで、本市教育委員会文化課が作成した江戸時代宇都宮城下復元地図（図9）を基にまち歩きを試みを試験的に行った。

筆者が単独で行ったものと、宇都宮市建設技術協会の現地研修の一貫として建設技術系若手職員を対象としたもの、及び研修の事務局による事前調査も行われた（表1）。

研修として行ったまち歩きは、時間が限られていたこともあり、文化財表示板を巡るまち歩きが中心となったが、歴史資源の再発見としてのまち歩きとしてモデルになるものと思われる。

一方、時間をかけて行うまち歩きは、地図と現場を比較し、現代の風景と過去の風景を想起しながら相互に交錯させることで、面白い発見をすることができる。たとえば、筆者と研修事務局により以下のような再発見があった。昭和30年代以降に埋め立てられた南館堀の痕跡（写真8）、すでに消失していたと思われていた土塁の痕跡（写真10・11）、江戸時代からある道（写真9・12）など

である。こうした歴史資源を基に、たとえば、平成通り沿いの千歳坂のいわれや、堀跡の泥沼でかつて蓮の栽培が行われていた風景の記憶などを地域の人から伺うことができた。こうした地域の人々の話から、かつての生活景を現代の私たちも理解することができるのである。



写真8 擁壁として残る南館堀の痕跡



写真9 今も生活の道として使われる旧城下町の道



写真10 松ヶ峰門跡付近に残る土塁の痕跡



写真11 下から見た土塁跡（同左）

写真8～10 筆者撮影

宇都宮市上下水道局
山崎史夫氏提供

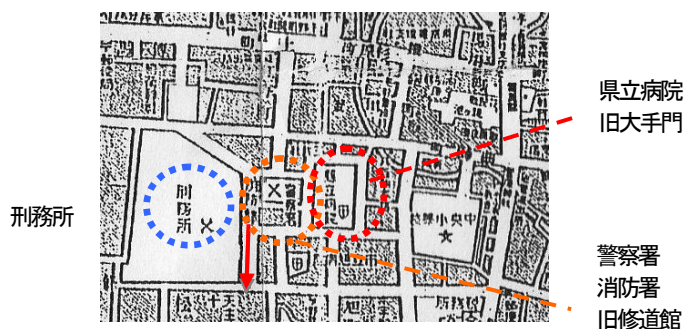


図10 旧修道館跡と大手門跡付近に立つ近代施設
宇都宮市役所『宇都宮市及び郊外全図』集英堂書店、大正15年を一部拡大し筆者加筆



写真12 旧城内の道から松ヶ峰教会を見たビスタ（図12矢印方向）



写真13 外壁が大谷石でできた松ヶ峰教会（同左近景）

写真12・13 筆者撮影

³³ これにより西館堀・南館堀付近は対象から外れた。

³⁴ 住宅地図から西館堀・南館が確認されたのは昭和33年までである。本丸付近の堀の一部は昭和40年代前半まで確認できた。

このほか、宇都宮の埋もれた歴史資源として、和風の近代住宅に併設された洋館がある。栃木県歴史文化研究会の佐藤信明氏によれば、戦災で焼け残った地区に、大正末期から昭和初期に建設されたこうした和洋折衷の洋館が集積し、7～8年前の現地踏査で60軒³⁵確認できたが、建替が進み喪失の運命にあるという。このように、放っておくと人知れずなくなっていく歴史資源のほか、歴史資源でありながら、かつてのまちの記憶が現代の風景から忘れさられたかにみえる場所の再発見もある。歴史資源を地域の景観計画や整備に活用することで、より豊かな環境になる可能性がある(図10、写真12・13)。

5 歴史資源の活用方策

さて、こうして再発見された歴史資源をどう活用するか。そこで、今も近世・近代の歴史資源を多く残し、三島通庸とも関わりのある鶴岡市と酒田市の視察を行ったが、誌面の関係から本章では鶴岡市の歴史資源の活用事例を中心に紹介する³⁶。

鶴岡市と酒田市それぞれの視察にあたっては、視察先の選定や解説、及び歴史資源を活用した活動を行う市民へのヒアリングなど、東北公益総合研究所の公益ビジネス研究プロジェクト研究員である東北公益文科大学大学院教授の高谷時彦氏と学外研究員の國井美保氏の協力の下行った。

鶴岡市は庄内藩の城下町として栄え、戦災から免れたことや古い物を大切にする風土もあり、近世の町割や近代の歴史資源を多く残している。加えて、旧城址周辺に歴史的建造物と公共施設を意図的に集積させている。たとえば、鶴岡出身の藤沢周平記念館を大正の近代建築が隣接する旧本丸



写真 14 旧本丸内に建築された時代小説家 藤沢周平記念館
(平成22年4月29日開館予定)



写真 15 新百間堀として部分再生した堀と鶴岡タウンキャンパス(東北公益文科大学)



写真 16 初代県令三島通庸により建設された旧西川郡役所(重要文化財) 致道博物館内



写真 17 旧絹織物工場を活用したシネコン・鶴岡まちなかキネマ工事現場
(平成22年5月22日オープン予定)



写真 18 豪商旧風間家住宅の丙申堂(国指定文化財)



写真 19 市民が参画し作成したまち歩きのためのマップ

に立地させている(写真14)。また、まちなかへ誘致した大学の建設に際し、かつてあった百間堀の一部を新百間堀という水辺空間として再生させた(写真15)。城郭に隣接する致道博物館には、江戸から移築した旧藩主の外屋敷や、郡役所、警察などの明治の近代建築(写真16)を集積させ、中心部の景観に彩りを添えている。

歴史的建造物の再生の例としては、かつてこの地域が絹の栽培から織物まで一貫生産を行っていたことから、戦前の絹織物工場が残っていた。所有者から商工会が相談を受け検討した結果、老朽化した建造物を壊さずに、シネマコンプレックスとして再生を図ることとなった(写真17)。

³⁵ 「和洋折衷の建物宇都宮にも60軒」『下野新聞』平成17年5月22日

³⁶ 酒田市の事例は、別途報告書で紹介する。

そのほか、豪商により明治に建てられた建造物（写真 18）など歴史的建造物の保存と公開がある。鶴岡市は、このように歴史資源に恵まれているものの、保全にとどまらず、さまざまな活用がある。そして、多様な組織形態の市民や民間団体が主体的に行っている点に特徴がある。たとえば、先のシネマコンプレックスも民間団体により運営されている。数ある歴史的建造物では市民による朗読を楽しむ会が開催され、歴史的建造物の活用とネットワークを図る活動がされている。また、歴史資源や地域の文化を紹介した、市民が作成するマップもたくさんある（写真 19）。さらに、城郭の堀の一部をなしていた川の清掃や、かつて舟運で活用していた舟の復活、江戸時代3日3晩踊ったという夏祭りの再生など、人の営みを現代的に再生する活動も行われている。このほか、400 年前からある山王通り商店街では、若手経営者がまちづくり会社を立ち上げ、空き店舗や空き地を活用しながら地元経済にも影響のある地域活性化事業も行っている。

こうした市民活動のほか、行政主導の都市計画や制度的な担保（たとえば、市街地の高度地区の適用や、柔軟な都市計画の変更、条例による計画や規制・誘導等）や大学³⁷の協力も大きいことが視察により明らかになった。

6 おわりに

視察結果を整理すると、歴史資源の活用としては、①歴史資源の保全と有効活用（公開・講座やイベントの開催・店舗・ミニ博物館など）や、②歴史資源のネットワーク、③地域の歴史資源（神社・小路など）の発掘とマップの作成、④それらを訪ねるルートの作成とまち歩き、⑤歴史資源を活用した景観整備（建物の再活用・喪失した風景



写真 20 宇都宮城址公園内に示された堀の跡



写真 21 大寛町に残る築80年の洋館（修繕後）

筆者撮影

大貫祐氏提供

の再生・周囲との一体的な整備）、⑥川・神社などオープンスペースの保全活動のほか、⑦かつての営みを現代的に再生する取組があった。

本市にも埋もれた歴史資源がたくさんあることが明らかになったが、本市に応用すれば、消失した建造物や堀であっても、その痕跡をアーバンデザインに取り入れる方法も考えられる（写真 20）。

また、残された貴重な土塁も公的な整備のみならず、市民による緑地保全活動の対象となる可能性もある。宇都宮の洋館に関しては、現状の悉皆調査や、所有者への支援（たとえば修繕・修復に関する支援や情報の共有等）が必要と思われる。こうした歴史資源の活用に加え、今後はより多くの人がまち歩きを楽しめる環境整備が期待される。

本研究は、旧宇都宮城下と周辺を対象としたが、歴史と資源は地域ごとであり、その調査と歴史資源の再発見と活用が今後の課題となる。地域の郷土史家や住民による地域史の編纂も各地で行われ始めており、こうした地域による取組にも期待したい。

3章で、都市計画・景観まちづくりの視点からまちの成り立ちと変遷の整理を試みたが、史実の誤りがあれば筆者の未熟さによるところである。そこで、今後は精度を高めると同時に、新・都市計画法の昭和40年代以降の変遷も含めた、宇都宮市の都市計画・まちなみ形成史の冊子の編纂を提案したい。都市計画・まちなみ形成史の共有は、官民間問わず、多様な主体による歴史資源を活用した生活景の創造に寄与するものと確信している。

³⁷ 佐藤滋教授を中心に、早稲田大学による鶴岡市の都市計画やまちづくりに関する調査研究や支援が1980年代から行われている。